

森下将充氏に聞く

森下記念病院は、1963年に現院長・森下将充氏の祖父君が「森下胃腸外科」として開業。1966年には病床数43床の森下胃腸病院を開設し、1969年には医療法人社団蒼葉会 森下胃腸病院として228床に規模を拡大。1972年から透析治療を開始。1992年、森下薫現理事長（当時、理事長兼病院長）の尽力によって、「森下記念病院」に改称し、消化器領域に注力した病院として、地域に根ざした医療を提供してきた。2019年6月より現在の院長と交代し、急性期病床51床、療養病床41床の許可病床数合計92床の施設となっている。

同院の診療の特徴について、森下氏はつぎのように話す。

「当院は、開院当初からしばらくの間、消化器外科を専門とする病院として地域に親しまれてきましたが、時代のニーズを考えると、今後は個人病院として消化器領域のみで続けていくことは難しいと判断し、私が院長に就任してからは、腎臓病全般を診療する病院として地域に根差した医療を展開しています。

当院の透析治療の特徴は、血液透析だけでなく、腹膜透析も積極的にやっていることが挙げられます。腹膜透析は、医療施設でしか実施できない血液透析に比べ、自宅や会社等でも実施でき、また患者様自身やご家族でも実施可能であることから、高齢者の患者様が増えてきてい

神奈川県●森下記念病院

地域の腎疾患医療を支える老舗病院が、電子カルテと透析システムを連携させて業務の効率化と労働環境の改善を果たす

森下記念病院は、開業より半世紀以上、地域に根差した医療を提供してきたことにより地元で支持されている。最近では、地域のニーズならびに長期的な経営戦略の視点から、腎疾患への対応を重視してきている。森下将充院長は、2021年よりIT化を推進し、診療の質向上と効率化、労働環境改善を実現してきている。そのIT化の中核は、Web型電子カルテと透析通信システムの連携だが、そのパフォーマンスは際立っている。独自の戦略的視点からIT化を指揮した森下院長らに、導入の狙い、システム選考、今後の展望等を聞いた。



森下将充 (もりした・まさみつ) 氏

2007年東京慈恵会医科大学医学部卒。同年東京慈恵会医科大学医学部腎臓・高血圧内科学 入局。東京慈恵会医科大学関連病院で腎臓内科医として勤務。2018年 Vanderbilt University (米) でMBAを取得。2019年4月医療法人社団蒼葉会 森下記念病院 副院長兼腎センター長就任。2019年6月より現職。

現在、有効な透析療法と言えます。現在、当院には血液透析の患者様約230名、腹膜透析の患者様約30名が通院しています。

また、もう1つ特徴があり、それはチーム力を生かした医療を展開していることです。当院には、常勤医6名の他、常勤職員174名、非常勤職員79名が所属していますが、大規模の総合病院と異なり、この規模だからこそ可能な、部署や役職の垣根を超えた1つのチームならではの患者様に寄り添った医療を展開しています。今後も、当院の理念「私たちの病院は圧倒的なチーム力で患者様に温かい医療を提供します」を実践し、患者様が自分らしく生活できるような医療を提供し続けたいと考えています」

「病院情報システム構築
IT化による費用対効果を考慮しながら業務の効率化と労働環境改善を目指す」
2021年7月、森下記念病院では、

の藍原憲弘氏はつぎのように話す。「チーム内で検討した結果、まず4社のシステムに絞りました。重要視したのは、まずクラウドでの対応が可能か否かでした。当院では専任のSEを常駐させることも、広いサーバ室を置くことも難しかったので、クラウドでの運用が可能なWeb型システムを選定することにしました。また、当院は透析医療がメインの施設なので、透析通信システムとの連携が良好であること、そして費用を抑えることも重視しました。

4社には院内スタッフ全員を対象としたプレゼンを行ってもらい、プレゼンに参加したスタッフには、システムの使い勝手や画面の見やすさ、操作性などを評価してもらいました。PHCの電子カルテシステム「Medicom-CK」は、Web型システムであること、透析通信システムとの連携が可能であること、費用も4社の中では低価格な上に、スタッフからのアン

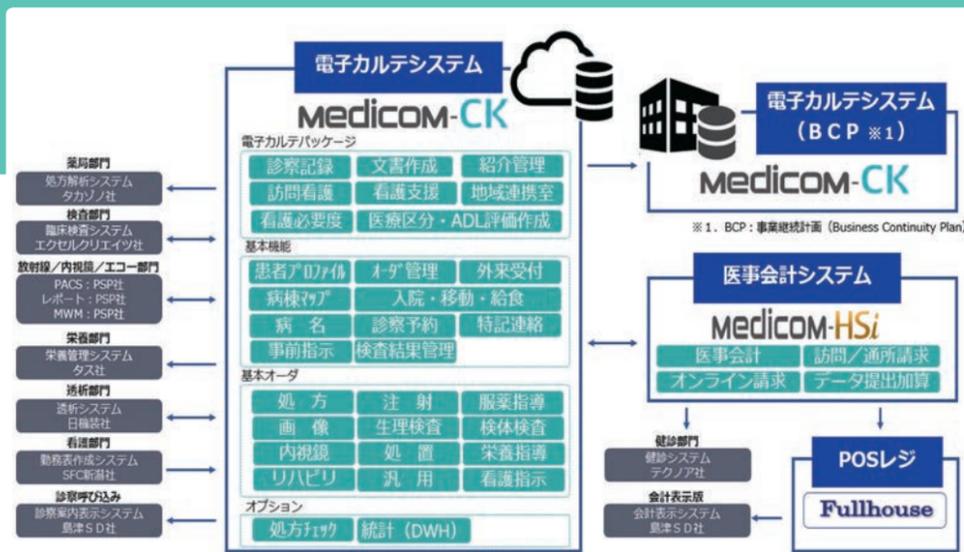


病院情報システム端末からは電子カルテシステム「Medicom-CK」と透析通信システム「FutureNet Web+」の双方を展開することが可能。両システムによる情報連携を実現することで、情報の共有および一元化に貢献している。



「Web型システムを活用したクラウドシステムはサーバ室の設置や専任のSEが不要で、システム導入のコスト抑制に有益です」と話す藍原憲弘氏。

森下記念病院 システム構成図



森下記念病院の病院情報システム構成図。Web型電子カルテシステムの特性を生かしたクラウド型のシステム構成を実現。医事コンピューターには「Medicom-HSi」を導入、電子カルテシステムとのシームレスな連携で、スムーズな受付・会計業務が可能となっている。

「FutureNet Web+」と接続が可能でしたし、PHCは費用対効果を高めるための提案等をしてくれるなど、ユーザーと共に成長していきたいという気概を担当者から感じられたことを評価しました」

「電子カルテ「Medicom-CK」
Web型電子カルテの特性を生かしてコスト抑制に加え残業時間短縮に成功」

電子カルテシステム導入の成果について、森下氏はつぎのように話す。「システム導入における運用法については、PHCと透析通信システムのベンダーに検討し、決定しました。

電子カルテシステムと透析通信システムは、院内のどの端末からでも操作することができるので、私自身も、一介の電子カルテシステムユーザーとして、スムーズな日常診療を実施できていますし、透析通信システムと電子カルテシステムの連携により、スタッフ間での情報共有が図られた点も良かったと思います。また、業務が効率化されたことで、職員の残業時間を減らすことができました。患者様の待ち時間も減っています。

なお、当院は、患者様の満足度の向上をはもろんですが、職員がより良い生活を送れることで、患者様にもより良い医療を提供できるという考え方をベースに病院運営を考えています。残業時間の抑制は、職員の満足度の向上、将来的には離職率の低下などにもつながると考えています」

「Web型システムを活用したクラウドシステムはサーバ室の設置や専任のSEが不要で、システム導入のコスト抑制に有益です」と話す藍原憲弘氏。

「従来、電子カルテシステムと透析通信システムの連携は決して良好とは言えないものが多かったのですが、PHCのシステムでも最も高い評価を得ていたことで、導入が決定されました」

透析治療に関する情報連携を実現し、業務の効率化と安全性向上を果たす

森下記念病院では80床の透析治療用ベッドを設けて、3部制による血液透析治療体制を敷き、約230名の患者が週3回、透析治療を行っている。透析部門には、看護師24名、クラーク5名、助手7名、臨床工学技士22名の計58名が勤務している。電子カルテ推進チームの1人で、電子カルテシステムと透析通信システムの連携・構築に携わった看護部の軍司慎太郎氏は、2つのシステム連携について、つぎのように話す。

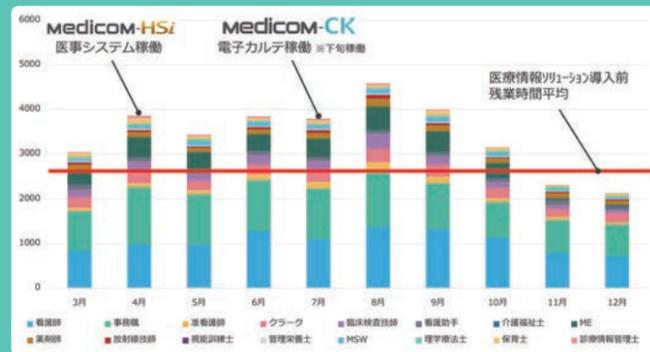
「透析部門のシステムと電子カルテの連携が、今回のシステム構築の要諦でしたので、システム担当者や臨床工学技士のスタッフらと綿密に相談しながら、システムの構築と運用法を検討しました。」

その結果、決定した運用法は、来院した患者様の情報はまず透析通信システムで記録し、その情報を連携している電子カルテシステムに自動的に反映させるというものでした。

また、透析通信システムでは、IT化以前はスタッフが測定した透析患者様の体重等を透析記録へ記入し、除水量を計算してコンソールへ入力していたのですが、手間がかかりましたし、透析記録が手元に届いていないと透析が開始できないなどのトラブルもありました。しかし、現在は患者様が来院して体重を測定すると、全て自動で進められ、除水量も自動で計算されて透析装置にデータが送られ、

IT System Innovation Review

2021年度 職種別残業時間推移



「透析通信システムと電子カルテシステムの連携で、透析診療の効率化・迅速化・安全性の確保が図れました」と話す軍司慎太郎氏。



森下記念病院における職種別残業時間推移。電子カルテ導入当初こそ、作業に不慣れな点もあって一時的に業務時間が増えたが、導入3ヵ月後から残業時間の大幅な低減を実現。業務の効率化だけでなく、労働環境の改善にも貢献している。

すぐに透析を開始できるようになりました。計算ミスや転記漏れなどもなくなり、業務が効率化されただけでなく、安全性にも貢献しています。

システム稼働直後は、ITに不慣れな点もあって苦労しましたが、稼働後3ヵ月が経過してからは、スタッフも患者様も慣れてきたこともあり、スムーズな運用が実現できています。また、臨床工学科のスタッフは、業務の効率化だけでなく残業時間も減っており、労働環境が大幅に改善された点も大きいですね」

藍原氏は、PHCによるサポートに助けられていると話す。

「当院は紙カルテからの電子カルテシステム導入だったので、医療ITは初めてというスタッフも多く心配していましたが、導入前の打ち合わせやスタッフのシステム研修など、PHCは精力的にサポートしてもらい、助かりました。」

また、システムが稼働してから暫くは週に1度、軌道に乗る始めてからも月に1度、システム運用に関する定例会を開催していますが、PHCは毎回同席して

くれ、とても頼りがいのある企業だなと感心しています」

今後のシステム運用について、森下氏は在宅患者の訪問診療やオンライン診療への活用を考えていると話す。

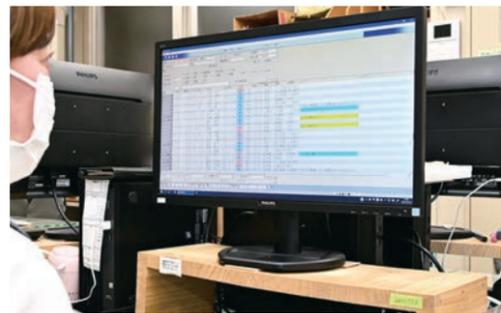
「コロナ禍の影響もあり、遠隔診療やオンライン診療は、今後、それに適したシステムや制度がますます整備されると感じています。腎不全の医療を進めていく上で、在宅でも実施が可能な腹膜透析の需要は増してくるでしょう。その際に、Web型の電子カルテシステムである『Medicom-CK』を活用できたらと考えています」

医療法人社団 蒼紫会
森下記念病院



森下記念病院は、80床の透析治療用ベッドを有し、腎不全の包括的診療を行うとともに、自宅でも実施可能な腹膜透析による治療を積極的に実施している。また、同院は北里大学病院をはじめ、聖マリアンナ医科大学病院、東京慈恵会医科大学附属病院、東京女子医科大学病院など大学病院とも連携し、消化器科や眼科、泌尿器科など、腎疾患以外の様々な疾病を持つ患者に対する診療も行い、地域の医療を支えている。

所在地：神奈川県相模原市南区東林間4-2-18
院長：森下将充
病床数：92床
(急性期一般病床 51床、療養病床 41床)
透析治療用ベッド数 80床



医事コンピューター「Medicom-HSI」は、受付から会計までの医事業務を、簡単な作業でスピーディーに処理。レセプトチェック機能「点検アシスト」や、病院経営の「見える化」を実現する統計アシスト機能など、業務に有用な機能を多数搭載している。